

「心の宝物」

教育委員 宮本里香

高校時代、東京都教育委員会主催の「東京都青少年養生セミナー」という日中友好交流事業に参加することができました。東京都と北京が友好都市と言う事で、都内の高校生が研修を行った後に、約2週間400名で大型客船「新さくら丸」に乗って中国の高校生と交流します。健全育成・国際交流及び社会参加を促進することを目的とした事業でした。

船の中では研修中に決まった班ごとで係りを決め、小さな仕事も大きな行事も各々が真剣に取り組んでいました。団体行動をするには協調性と規律は大切なことです。問題点などあればみんなで話し合い、考えながら過ごしたこともいい経験になっています。

船は天津に着岸し、北京・上海へ移動しながら、スポーツ交流や地元の家庭への訪問・人民大会堂での晩さん会・万里の長城などの歴史・文化遺産に触れることができました。中国の高校生とは、限られた時間の中で、英語と漢字と身振り手振りで一生懸命会話をした事が懐かしく思い出されます。みんな純粋で目標を持ちながら、自分の為、国の為にと、まじめに頑張っている姿がとても印象的で素敵だなあと感じました。中国の人を知るごとに「二好」「謝謝」「再見」など自分から声をかけられるようになっていきました。多くの感動や刺激を受け、自分の視点や意識が変わってきたのだと思います。この体験は私にとって生涯の宝物となっています。

教育委員会カレンダー一年間予定表

月	日	内 容	場 所
4	18	大島町体育祭野球大会(中学生の部)	第一中学校グラウンド
		大島町体育祭バレーボール大会(中学生の部)	第一中学校体育館
5	17	大島町体育祭バレーボール大会(婦人の部)	大島高校体育館
	23	大島町体育祭ゲートボール大会	伊豆大島ゲートボール場
8	4	大島町体育祭 水泳大会	弘法浜サンセットプール
10	11	大島町体育祭レクリエーション大会 予備日 10月18日(日)	つばき小学校グラウンド
	下旬	就学時健診	開発総合センター他
11	1	大島町体育祭 駅伝競走大会	大島全域
12	8	大島町立小中学校連合音楽会	開発総合センター2階大集会室
	26	雪国体験学習(12月29日まで予定)	新潟県上越市大島区(予定)
1	9	成人式	開発総合センター2階大集会室
	15	大島町立小中学校連合作品展 (19日まで予定)	開発総合センター2階大集会室
2	6	大島町体育祭 野球大会(小学生の部)	差木地地域センターグラウンド
	中旬	大島町文化祭 芸能大会	開発総合センター2階大集会室
3	上旬	大島町文化祭 作品展	開発総合センター

(柔剣道大会・Jrスポーツフェスティバルにつきましては調整中)

※啐啄(そったく)とは

鳥の卵が孵化しようとするとき、殻の中で雛鳥が外に出ようとして内からコツコツ殻をたたき音を「啐」といい、母鳥がその孵化の瞬間を悟り、殻の外をコツコツつき破ることを「啄」といいます。この啐と啄の呼吸が合うとうまく殻が割れ、丈夫な雛が誕生しますが、どちらか早すぎても遅すぎても良い雛は生まれません。教育も教わる側の生徒と教える側の先生が、啐・啄同時である事が理想であり、依って大島町教育委員会便りを『啐啄』と名づけました。

そっ たく

啐啄

令和2年4月1日刊行 No.16
編集・発行 大島町教育委員会
教育文化課事務局
TEL04992-2-1453
題字「井島 吉春」

「将来の夢は！」

教育長 谷 口 浄

ほとんどの人は、人に尋ねられて初めて「将来の夢」を考えるようになるのではないのでしょうか。質問や作文を書く機会を与えられることで自分と向き合い、そこから人生が変わりだす人もいます。

では私の場合は、どのような「夢」であったのか。1964年、東京オリンピックが開催された年で、私は小学3年生でした。学校からの帰り道に差木地漁協があり、その作業場で午後になると15人前後の人だかりがあり、皆でテレビを見ていました。なんと、

カラーテレビでオリンピック観戦をしていたのです。当時は少しずつテレビが各家庭にも普及しはじめていましたが、それでも白黒画面のテレビがほとんどでした。漁協で見たカラーテレビのオリンピックは衝撃的でした。初めは観戦の環の中に入れず外から見ていたのですが、日を追うごとにいつしか最前列で見ていました。ランドセルをしょった(背負った)まま釘付けです。この時「俺も将来オリンピックに出たい!」そう思いました。これが最初の「夢」です。

中学生後半になると生意気盛りになり、進路や仕事は自分の努力しだいでどのようにもなる! そう思っていました。しかし、将来何をしていきたいかは漠然とした考えしかなく、これといった目的や目標もありませんでした。この時点では将来何をしたいか分からないので高校生活3年間で見つけてみようと思いました。高校生の時に会った先生は、皆情熱のある素晴らしい先生方でした。この3年間は、無知な私にとって一つひとつが貴重なものとなり、目からウロコの思いと新鮮な発見がありました(この頃が私の一番の成長期でした)。

高3になり、大島は好きだが、高校を卒業して島に残っても何が出来るのか?と考えました。島が好きで将来島に戻るなら、今は自分には「力」として出せるものがない。そうならば、島を知っている者が外を見て、体験し得たものを島の中で実践していくことが出来れば、自分も島もプラスになるのではと考え大学へ進学しました。大学生活は勉強に部活にと必死な思いで頑張ったと思います。

卒業後は、島内で高校の講師を経験したあと、前記の恩師からの誘いもあり埼玉県の2千人規模のスィミングクラブでコーチとして二つの会社で勤務し、どちらのプールも野原から建物を建設し、会員を募っての出発であり、やりがいもありました。また、将来大島に私設体育館を造って島の人に楽しんでもらい、1万人の方々が健康に過ごせるようにとの思いがありましたが、体調を崩しスィミングクラブ勤務は3年で終わり再度島に戻ることにになりました。役場勤務となり社会教育の一片を担うことで島人のコミュニティと健康維持、増進を図りたいとの思いはそのまま続けることが出来たと自負しています。

このような体験の中では「高校の教師になりたい」・「部活では全日本の頂点に立ちたい」・「会社では社長まで目指したい」・「コーチとして超一流選手を育てたい」・「私設体育館を建てたい」等、夢としての目標や欲もありましたが、同時に沢山の挫折も味わいました。

子どもの頃の夢がそのまま実現する人もいれば、さまざまな状況により自分の夢が遠ざかってしまう人もいます。むしろそういう人のほうが多いのではないのでしょうか。

同じ夢をずっと持ちつづける人、変わる人、一つ実現できたら終わりではなく未来に向けて夢を切り開く姿勢が大切です。

誰しも将来の夢は若い頃に決定できれば幸せです。また、生きていくうえでこれからの社会は予測することがますます困難であり、大人ですら将来の夢は見えにくいといえます。しかし、どのような時代(世の中)になっても夢を持ち追いつけることは大事です。

島の子ども達には自分の「将来の夢」をどのように描いていくか、一日でも早く「気付き」、目標を持って努力をしてほしい。将来の夢の実現のためには、小中学生の時に基礎基本をしっかりと学ぶことが大切です。学力がないからということで夢を諦めるのではなく、「将来の夢」として「成りたい者になる」。そういう「力」を身に付けられるよう今から取り組みをしていくことが大切と思います。

「子ども達よ!さあ頑張れ!これからだ!」。

「改めてこれからの教育の目標について」

教育長職務代理者 山田 三正

令和2年度から小学校教育（中学校は令和3年度から）は新しく改訂された学習指導要領によって進められます。改めて理由などを書き出します。

改訂の理由は、グローバル化や、スマートフォンの普及、ビッグデータや人工知能（AI）の活用などによる技術革新が進み、10年前では考えられなかったような激しい変化が起きており、今後も、社会の変化はさらに進む。未来の予測が困難な時代の中で、子供たちには、変化を前向きに受け止め、社会や人生を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていくこと。子供たちが学校で学ぶことは、社会の変化を見据えて、子供たちがこれから生きていくために必要な資質・能力を踏まえて改訂しています。

その中で育てたい「資質・能力」は、社会の中で生きて働く知識となる「知識及び技能」そして、その「知識及び技能」をどう使うかという、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力など」、学んだことを社会や人生に生かそうとする「学びに向かう力、人間性など」を含めています。これだけでは具体性がありませんが、この内容について具体的に記述してあるのが指導要領です。

考えたいのは大島町の小中学校における、その目標であり方向性です。

児童生徒は「知識と技能を身につける。」該当年齢における基礎知識・技術を計画的に確実に身につけること。そして「考える力と判断力をつける」「答えを出す」「表現し実践する力をつける」。

こうなってほしいと思います。

学び続ける力を身につけ、人としてそれをどう生かすか。自分のため世の中のために生きていく人になって欲しいと考えます。目の前の課題を解決するのに、誰かの求める正解を探し求め、出すことではなく、今自分が考えて可能な限りの「自分の考えをだす」ということだと思えます。予想できない未来を不安がり怖がるのではなく、こんな未来にしたいと考え、これからの自分で未来を作ることと決意し、その未来で生きるための自分の答えを出せるようになってほしいと思います。そのためにより多くの資質・能力を身につけ、出した答えがより良い結果を生むように努力することが出来る人になって欲しいと思います。そんな大島であって欲しいと考えます。

「名作 蜘蛛の糸」

教育委員 井島吉春

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」という作品を読んだことのある人は結構いると思うが、この短編の中にはいろいろと考えさせられる深い教えがある。

あらすじはカンダタという大罪人が地獄に落とされて苦しんでいたが、彼は以前踏み殺そうとしたクモをかわいそうだと言って助けてやった事が有ったので、そのことをお釈迦様が思い出し、それだけ善い行いをしたのだから地獄の苦しみから救い出してやろうとクモの糸を垂らし、それで救ってやろうとした。カンダタはそのクモの糸につかまり天上界へのぼってゆこうとするのだが、他の者達もしがみついたのぼってくる。その重みで糸が切れそうになったので他の者にこの糸はオレのものだ下りろと言った瞬間、糸がきれてしまい再び地獄へ落ちてしまうというストーリーである。

この小説の中には、悪いことをした人は地獄で苦しむ、悪いことをした人を救ってくれる人がいる、少しでも善い行いをしていれば救ってもらえる、自分だけが助かろうとすれば救ってもらえないなど、ある意味極めて道徳的な、まあそうだろうなあという世の中の理想的な規範のようなものが端的に表現されている。つまり、どんな失敗をした人でもやり直すチャンスは必ず有り、それを支援してくれる人もいる。しかし自分だけが良ければそれで良いという人は結局救われない。それどころか破滅してしまうという私達の集団社会にも通じるような内容である。

今の時代、善い行いをすれば報われて悪いことをすればバチが当たると思っている人はいったいどれくらいいるのだろうか。何事もコツコツ努力して一生懸命正直に生きてゆけば幸せになり、何の努力もせず悪いことばかりしていればあたり前のように自滅する、このように考えられるのが普通と思うが、人間は悲しいかな、善悪2つの心を宿している。理性で心のバランスを取り毎日を過ごしている。

過日新聞に「教科書に小説は必要か」というアンケートが載っていて9割が必要となっていたが、高校の国語では2022年から変化が有るといふ。実社会で役立つ国語能力と言うことで実用文に力を入れ、小説などの文学は選択科目になるようだ。現代のハイテク時代と比べると、とても不便でそれをあたり前として生きてきた当時の一流の人達の文章には心打つものが多い。文体も美しいし、理由はわからないが何しろ魅力がある。今後小中学校でも小説を読む機会が減ってゆくのだろうか。名作から学ぶことは多い。何より「生きる」ということを考えさせられる。生きる知恵、共生共存の極意は昔の名作から学べると思うがどうだろう。

「楽しむこと」

教育委員 山本忠夫

元400mハードル選手の為末大さんのコラムを読んだ時のことです。為末さんは「楽しむこと」について、「楽しむこととは主体的に行うということに尽きる」と言います。「私の競技人生哲学の根底には楽しむことがある。これは私にとって目的でもあり、かつ一番有効な戦略でもあった」とも言います。さらに、「楽しいことをやることと、やっていることを楽しむことは違う。前者は受け身の行為であり、後者は主体的な行為である。前者は誰かが人を楽しませるために作り出したものによって遊ばされている。後者はそこにあるものを自分なりの工夫で編集し直し遊んでいる。比重が楽しませられることに近づきすぎると、自らそれを楽しむという主体性が失われていく。」と。なるほどなあ、と思いました。これを読んで思い出したことがあります。

高校時代の部活、すごく厳しいところでした。失敗すると殴られる時代、今では考えられないですが、いつも緊張して取り組んでいました。ただ、その先生は大筋の理想は示してくれるのですが、いちいち「あれしろ、これしろ」とは言いません。黙って見ていて先生の求めていることと違う失敗をすると、鉄拳が飛んでくる。なので先生の思考を言われずとも理解し、実行するしかありません。言われるのではなく自分で考える、でした。

また、毎日単調な練習。同じことを行う。慣れてくると本当につまらない。でも、失敗はできない。どうやってその時間を面白く過ごすか…。そこを真剣に考えました。最初は「帰る途中の売店で、〇〇を食べよう」みたいなことで気を紛らわせましたが、すぐに底を尽きました。試行錯誤した結果「上手な人はどんなプレーをするのか？」を見て、考え、試し、検証しながらプレーをするようにしました。そしたら、いろんなことに気づくんですね。やらされているのではなく、自分で工夫をしてやってみて気がついたらすごく上達していました。だから今でもスポーツは考えるものだと思います。それがすごく楽しい。これが、為末さんがいう「やっていることを楽しむ…」という感覚なのかな、と思いました。

教えることは大事、でも教えすぎてはいけない…。とよく言われます。それは、主体的に楽しむことを子供自身が気付かなければならないということかな…と。

アクティブラーニングも子供たちの「主体性」を育てるものとして、導入されています。その難しいさじ加減を子供たちにどのように伝えるか…。きっと学校の先生はその辺を毎日大変なご苦労をされていることと思います。心から応援したいと思っています。